



大正製薬 リポビタン

第46回 全国選抜高校テニス大会 大会レポート



全国高等学校体育連盟テニス専門部
近畿地区常任委員 門田 聖五

大正製薬様がタイトルスポンサーとなって2年目の第46回大会が、3月20日より26日までの7日間、例年通り博多の森テニス競技場と春日運動公園で行われました。今年はコロナ過からもほぼ解放され、以前の選抜が戻ってきたように感じられた大会となりました。また、天候にはかなり左右された1週間ではありましたが、普通に大会が開催されることがどれほど有り難いことなのかということを改めて感じさせられました。



〈開会式 3月20日(水)〉

開会式は、博多の森テニス競技場室内コートで男女各48チームのキャプテンのみが行進し、メンバーは観客席、保護者は観客席と室内コートからの観戦となりました。

古賀大会会長の挨拶、来賓としてスポーツ庁より審議官橋場様、公益財団法人日本テニス協会より専務理事土橋様を始めとして、今大会を支えていただきたくさんのパートナーが紹介され激励のお言葉をいただきました。



選手宣誓に選ばれた男子北海道北見北斗高等学校、安田壮主将と、女子石川県金沢高等学校、池田飛鳥主将が「この大会を開催していただけにあたり、ご尽力いただいた大会関係者の皆様、支えてくださった方々に感謝すると共に、能登の1日も早い復興を願い、最後まで誠心誠意プレーすることを誓います」と宣誓した。



〈 団体戦 〉3月21日(木)～25日(月)

・21日(木)・22日(金)

天候に恵まれ順調に日程を消化することが出来、男女ともベスト16が出そろった。その中では、男子3～4シードの東山(京都)を④-1で破った佐土原(宮崎)が力をを見せた。

・23日(土)

雨の影響で日程変更や室内コートへの移動など、選手のみなさんやチーム関係者にはとても大変な1日となりました。その中で、福岡県補助員のみなさんが一生懸命水取りやコート整備を行ってくれたおかげで、途中試合を1試合残すのみで無事に終える





ことができました。

結果は、男子ベスト8に関西（岡山）、相生学院（兵庫）、麗澤瑞浪（岐阜）、大分舞鶴（大分）、佐土原（宮崎）、北陸（福井）、法政二（神奈川）、湘南工大附（神奈川）が残り、九州勢2校、関東勢2校、近畿1校、中国1校、北陸1校、東海1校という勝ち残りでした。

このベスト8に進出するということが、来年度（第47回大会）の各地区の強度枠に大きく影響していくということを考えると、今後も注目していきたいと思います。

さて、そのような中でベスト4に進出したのは、関西（岡山）との激戦を制した相生学院（兵庫）、初のベスト4進出を果たした麗澤瑞浪（岐



阜）、ノーシードから勝ち進んだ佐土原（宮崎）、湘南工大附（神奈川）との関東対決を制した法政二（神奈川）であった。

また女子ベスト8には岡山学芸館（岡山）、沖縄尚学（沖縄）、野田学園（山口）、相生学院（兵庫）、松商学園（長野）、大商学園（大阪）、山陽女学園（広島）、四日市商業（三重）が残り、中国勢3校、近畿勢2校、北信越1校、九州1校、東海1校という勝ち残りでした。

その中でベスト4に残ったのは、優勝候補の岡山学芸館（岡山）を③-0で破った沖縄尚学（沖縄）、野田学園（山口）との激戦を制した相生学院（兵庫）、初のベスト4に進出した大商学園（大阪）の3校で、残り1つの枠を巡って行われた四日市商業（三重）と山陽女学園（広島）との試合がまさに死闘となっ

た。この試合は2-2にもつれて、勝負は最後のシングルス3にかかった。山陽女学園（広島）の清田選手と四日市商業（三重）の堤選手の試合は20時を過ぎても決着はつかず、ついに佐藤レフェリーのサスペンデット宣言の後、翌日への持ち越しとなった。室内コートで行われたこの試合は、両校の応援もさることながら、その盛り上がりは、今大会の一つのハイライトであったように思われる。



・24日（日）

いよいよ準決勝である。本来ならばここから3セットマッチで行われるところであったが生憎の天候の関係で、スケールダウンを余儀なくされ、8ゲームプロセットで試合を行い、すべての試合を室内コートで行われることとなった。



まず男子であるが、トップハーフの相生学院（兵庫）対麗澤瑞浪（岐阜）の試合はシングルス1、ダブルス1をともに麗澤瑞浪（岐阜）が制し、決勝進出に大手をかけた。しかしここから相生学院（兵庫）の逆襲がはじまり勝負はシングルス3にもつれ込み最後は相生学院（兵庫）の

西山選手が勝ち切り、逆転で決勝進出を決めた。

ボトムハーフは、ノーシードから勝ち上がった佐土原（宮崎）対法政二（神奈川）の試合であったが、シングルス2で前年の苫小牧インターハイでシングルス準優勝の宮里選手（佐土原）を曾根選手（法政二）が破ったことで、法政二が③-2で接戦を制し、決勝に進出した。

続いて女子である。前日のサスペンデットの試合は、四日市商業（三重）が制し、準決勝進出を決め、トップハーフは沖縄尚学（沖縄）対相生学院（兵庫）、ボトムハーフは大商学園（大阪）対四日市商業（三重）との対戦となった。

まずトップハーフの試合は、沖縄尚学（沖縄）がシングルス1を制し、ダブルス1も6-1、7-2と相生学院（兵庫）をリードし、ほぼ勝利を手中に収めかけていた。ところがここから相生学院（兵庫）の逆襲がはじまり、結果的に7ゲーム連取をして⑨-7で逆転勝利を收め、トータル③-2で相生学院（兵庫）が決勝進出を決めた。

ボトムハーフは、大商学園（大阪）が四日市商業（三重）を③-0で破り、初の決勝進出を果たし、相生学院（兵庫）との近畿勢同士の決勝戦が実現した。

・25日（月）

男子決勝戦は5連覇（コロナによる大会中止を挟んで）を目指す相生学院（兵庫）と9-12シードの法政二（神奈川）の対戦となった。生憎の天候により室内コートでの試合となつたが、相生学院（兵庫）が実力を發揮し、③-0で見事5連覇を達成した。昨年のインターハイも含め、高校総体では厳しい結果が続いていたが、5ポイントの選抜においては層の厚さと勝負強さを見せた。

女子決勝戦は、久々の近畿勢同士の対戦となった。近畿地区予選でも両校は決勝で対戦し、その時は③-0で相生学院（兵庫）が勝利していたが、個々のゲーム内容は伯仲していた。

決勝は、2面展開で行われ、まず大商学園（大阪）がシングルス1、ダブルス1をともに勝利し、初優勝に大手をかけた。そこから相生学院（兵庫）が巻き返し、2-2に追いつき最後はシングルス3の石川選手が勝利を決め、相生学院（兵庫）が5年ぶり4度目の優勝を飾った。翌日、敗れた大商学園（大阪） 笹井監督から「相生学院（兵庫）の技術の上にのっかるメンタルにやられました」とおっしゃった言葉が特に印象的であった。





〈 個人戦 〉 3月22日（金）～26日（火）

本年度は、男女各48校のNO1選手に加えて、各府県のNO1選手も含め、男子72名、女子71名で試合が行われた。

・ 22日（金）

天候に恵まれ、春日公園テニスコートにて男女1回戦が消化された。



・ 23日（土）

雨による中断、コート整備、コート変更を何度も行いながら、春日公園テニスコートにて男女2・3回戦が消化された。



・ 24日（日）

博多の森に舞台を移し、雨による中断、コート変更などを行ながら、男女4・5回戦が消化された。



・ 25日（月）

団体戦上位進出校は連戦の疲れもあり思うような結果につながらない選手も多く、男女とも誰がUSオープンのチケットを勝ち取るかが見えない展開となったなかで、男女ベスト6が出そろった。



男子ベスト6は、団体優勝の前田透空（相生学院）、同準優勝の吉田琳（法政二）、浅田紘輔（佐土原）、今西珀人（京都外大西）、松村怜（湘南工大附）、上田頼（橘学苑）が残り、ベスト4には前田（相生学院）、吉田（法政二）、浅田（佐土原）、松村（湘南工大附）が入った。



女子ベスト6には、団体優勝の朝倉優奈（相生学院）、同準優勝の千葉陽葵（大商学園）、中島莉良（岡山学芸館）、網田永遠希（野田学園）、上野梨咲（山陽女学園）、水口由貴（沖縄尚学）が残り、ベスト4には朝倉（相生学院）、千葉（大商学園）、中島（岡山学芸館）、上野（山陽女学園）が入った。



・ 26日（火）

いよいよ大会最終日。

男子SFでは、浅田（佐土原）が前田（相生学院）を6-4, 6-3で





下し、決勝進出、松村（湘南工大附）が粘る吉田（法政二）を 6 - 2, 7 - 5 で下し、決勝進出。決勝では浅田（佐土原）が松村を 6 - 0, 6 - 0 で破るという圧巻の勝利であった。浅田の正確無比のストロークは、安定度抜群で US オープンジュニアでの活躍が期待される。

一方女子 SF では、中島（岡山学芸館）が朝倉（相生学院）を 7 - 5, 6 - 4 で下し、決勝進出、千葉（大商学園）は上野（山陽女学園）を 6 - 1, 6 - 2 で下し、決勝に進出。

決勝では、第 1 セットを 3 - 6 で落とした千葉（大商学園）が持ち前の粘り強さを発揮し、第 2 セット 6 - 2、第 3 セット 6 - 4 という大熱戦の末に中島（岡山学芸館）を振り切り、見事 US オープンジュニア WC のチケットを手に入れた。



〈 終わりに 〉

・若干の不安を感じつつも、コロナ禍から解放され、いわゆる「今まで通りの大会」が無事に行われ、終了したことを大変嬉しく思います。天候に翻弄されたことは否めませんが、高校生の勝利に対する純粋な眼差しを見ていると、思わずこちらも引き込まれそうになったシーンがいくつもありました。

やはり高校テニスは素晴らしい！と、改めて感じることができましたし、この博多の地が、目標とすべき場所であるということを再認識できました。高校生の部員数減少は如何ともしがたいものではありますが、来年度（第 47 回大会）以降も夢を実現させる大会であり続けてほしいと思っています。

最後になりますが、大会中にマナーの低下を感じさせるシーンがいくつか見られた事は、非常に残念でした。毎年運営をしていただいている



福岡県のスタッフの皆さんや審判員を務めてくれている高校生諸君の存在があってこそ、大会が成立しているということを決して忘れないでほしい。

そして、もう一度初心に戻って、テニス部に入って良かった、全国大会に出場出来て嬉しかったと思ってくれる選手を1人でも多く輩出できるようになることを願いつつ大会レポートを終わらせていただきます。

